

この大いなる残飯よ！

山下惣一



この入いなる残飯よ!

山下惣一



家の光協会

50067339



●山下惣一（やました そういち）

昭和十一年、佐賀県唐津市に生まれる。農業従事（水田一・二ha、ミカン園一・五ha、野菜畑八〇a）のかたわら創作活動が続ける。日本農民文学会会員、『玄海派』同人。昭和四十四年『海鳴り』で第十三回日本農民文学賞受賞。昭和五十四年『減反神社』で第二十七回地上文学賞受賞。著書に『ひこばえの歌』『農家の父より息子へ』『農家の主より消費者へ』（いずれも家の光協会）『土と日本人』（日本放送出版協会）『いま、米について』（ダイヤモンド社）など多数。

この大いなる残飯よ！

平成三年十一月一日 第一版発行

著者 山下惣一

発行者 角中正也

発行所 社団法人家の光協会

東京都新宿区市谷船河原町十一（〒一六二）

電話 東京〇三

（五二六）一（二三〇）一（販売）
（三二六）六（九〇四）二八（業務）
（三二六）六（九〇二）八（図書編集）

振替 東京五―四七二四

印刷 精文堂印刷株式会社

製本 寿製本株式会社

落丁や乱丁本はおとりかえいたします。

定価（税込）は表紙カバーに表示してあります。

この大いなる残飯よ！／目次



〔第1章〕 飽食カラスが飛び交う暁の街並みの光景

～銀座から～

夜明けの銀座に通う黒い群れ 8

数寄屋橋の主の「残飯紳士」 12

繁華街のごみの六〇パーセントは厨芥 15

ごみ分別業者の「無分別」への怒り 19

食糧輸入大国ニッポンの飽食現象 23

「残飯紳士」との静かなる攻防 26

高級肉料理店の残飯の行く末 32

〔第2章〕 超高層ビル群から降る残飯は……

～新宿から～

「ごみ博士」のごみ基礎講座 42

新宿のごみはアナーキー!? 47

戦後の息吹が宿る「思い出横丁」 53

摩天楼の残飯はエア・シューターに乗って？ 56

近代化されても最後は人の力 60

超豪華！ 都庁舎の「残飯冷蔵庫」 64

〔第3章〕 食生活を変貌させるファストフード店の脅威 — 67

↳上野・恵比寿・池袋から↳

プロ野球が急に中止になったら？ 68

ファストフード店急成長の実相 74

「一家団欒」の文化を駆逐 80

帰るべき食のふるさとを失った若者たち 85

「余さず不足せず」がモットーだが 90

〔第4章〕 ギャルはグルメ派？ それともヘルシー派？ — 99

↳N・S女子大学から↳

「ご飯なんて面倒くさい」 100

女子大生の食生活にもお国柄 108

Oh! 食キング! ギャルたちの呆食 110

大学で初めて知ったコメの研ぎ方 119

ダイエット娘の辛い授業料 125

〔第5章〕 どっこい生きてた残飯養豚の昔と今

〜埼玉県川越市・志木市から〜

残飯はパンティの汚れ具合と同じ!? 130

「養豚の時代だと張りきったのに」 132

買い手市場ならぬ取り手市場に 137

盲点、食品工場の残渣は高品質 143

どっこい生きてた真正正銘の残飯養豚 146

年中無休の病院はお得意さま 151

残飯を下水に流せば東京湾は糊の海 155

人生の選択を迫る「新生産緑地法」 159

日本の都市はガン細胞 162

〔第6章〕大消費地「東京の台所」ウラ事情

↳築地・大田市場から

あわただしい「魚河岸」の光景 168

魚の半分がごみになる！ 173

都民の胃袋を支える巨大市場 180

野菜よりごみ処理代が高かったことも…… 185

ごみ箱にあふれる腐敗輸入果実 189

変わる青果物流通システム 195

野菜と果実で四七〇万トンの残渣が発生 198

数字で「飽食の実態」に迫る 201

〔第7章〕「最終処理工程」にみる残飯の末路

↳多摩川清掃工場から

「残飯の終着駅」はフル稼働 208

末路は灰と水蒸気と炭酸ガス 212

207

167

「ごみ問題緊急対策室」の苦慮 215

処理場をもたないごみの行く手 219

【第8章】

どうなる「繁栄と飽食」の果て

ふたたび銀座から

223

ネオン街の蝶はきょうも舞う 224

繁栄と飽食の果てに待つものは…… 227

あとがき 234

装丁・イラストレーション 北村 治

写真撮影 岩松喜三郎 ほか

取材協力 残飯問題ウォッチャー班

第 1 章



飽食カラスが飛び交う 暁の街並みの光景

～銀座から～



日々の糧を求めて出動する「残飯紳士」

撮影＝岩松喜三郎

夜明けの銀座に通う黒い群れ

東京、銀座。午前四時。

「あ、きた、きた。来ました。来ましたよ」と渡辺くんが声をひそめる。

しらじらと明けはじめたビルの上空を、大きく羽根をひろげて一羽のカラスが横切った。続いて、二羽、三羽。カラスの数はたちまちふえて、五十羽、百羽、そしてやがて二、三百羽にもなった。カラスは払暁のビルの屋上から下界を覗^{うかが}い、安全を確認すると、さわさわと羽音をたてて舞い下りてくる。大型のカラスだ。

都市鳥研究会（代表唐沢孝一、都立城東高校教諭）の調査によると、現在東京都内に棲むカラスはおよそ一万羽、その大部分は口ばしの大きいハシブトガラスである。明治神宮の森を飛び立ったカラスの群れが、皇居、日比谷公園の上空をへて銀座へ向かうのが同研究会によって確認されている。東京には森があり、そして豊富なエサがある。一日をビルの屋上や公園ですごしたカラスは夕方、ビルの上空を超えてねぐらに帰っていく。これが銀座のカラスの日常である。払暁の銀座は、都市カラスにとつ

ての一日のはじまりである。

みるみるカラスの数が増えてくる。世界の都市の中でも東京のカラスは異常に多いのだそうだ。グワー、グワーという鳴き声がビルの谷間にこだまして不気味だ。まるで、カラスの森か、ヒチコックの映画「鳥」の世界に迷いこんだような錯覚をおぼえる。

カラスが狙^{ねら}っているのは、路上に出されている残飯である。

八丁目から七丁目へ銀座通りを歩く。街は眠っている。人通りはない。

ある、ある。すごい量だ。雑居ビルの前にポリ容器が十個。五〇リットル入りと九〇リットル入りの二種類。中身は、寿司、お好み焼、肉、ご飯、スパゲティ。割箸や焼き鳥の串がごちゃに混じっている。ポリ桶の横に黒いビニールのごみ袋が二十数个、口をしばって積み上げてある。ウイスキーの空ビン十五本。一〇メートル進むと、ファストフードの店の前に、ダンボールの空箱が積んである。

三〇メートル。ポリ容器が三つ、袋が十八。さらに三〇メートル。ポリ四、袋二十……早朝の銀座の街並みは、さながらごみの陳列場だ。

裏通りに入る。

「ひえーっ」と渡辺くんが悲鳴をあげた。すでに四つ角の残飯の山にカラスが群がって食べていた。その数、五、六十羽。

すずらん通り、みゆき通り、花椿通りと歩く。どこも同じ光景である。道路の両側に、ほぼ等間隔で残飯の容器やポリ袋が積んであり、佐賀平野の稲子積いねこずみ（刈り稲をまゝるく積み上げたもの）のようだった。そして、どのごみの山にもカラスが群がって食べている。

「すごいですねえ」と渡辺くんがいう。

「すごいもんだな」と私はいった。

渡辺くんは、家の光協会出版部に所属する二十六歳の独身青年。すつくと伸びた身体にジーンズがよく似合うのだが、発声が異様に甲高い。柔和な丸顔にベッコウ色の太縁眼鏡をかけている。私は佐賀県で農業を業としている五十五歳の農家のおじさん。現代っ子の彼とおじさんの二人で、飽食の時代といわれる現代の、東京の残飯事情を探検してみようという趣向である。自称「残飯探険隊」。私が隊長、渡辺くんはただ一人の隊員である。

「あ、いました。やっぱりいましたね」と渡辺くんがささやく。

向こうから一人の男が歩いてくる。人呼んで「残飯紳士」。じつは、この人たちがカラスよりも先客なのだ。

「残飯紳士」とは残飯をあさって暮らしている人たちのことである。浮浪者とは区別されている。なるほど身なりもいい。ちよつと見ると工事場から朝帰りしている労働者のようにもみえる。街を歩いているだけなら、ほとんど気がつかない。ところが、ひよいと立ち止って、ポリ容器のふたをあけて、手を突っこみ、手づかみで食べはじめ。黒いポリ袋の口をあけて中を物色する。そして、髪が長く、荷物が多いのが特徴だ。片手にコウモリ傘。シヨルダーバッグを肩にかけ、大きな紙袋を提げている。ちら、ちらと残飯の山を見ながら足早に歩く。私たちが近づくとパツと飛びたつカラスが、不思議と紳士がそばを通っても逃げない。顔馴染みなのである。

角を曲ると、別の紳士が、ビルの玄関にダンボールを敷いて食事中であった。服装はそんなに悪くない。いわゆるルンペンとは違うという意味で「紳士」と呼ばれている。この朝出会った紳士十二名、淑女二名。どの通りでも、どの街角でも紳士に出会う。この人たちもまたカラスと同じように、豊富な銀座の残飯を求めて出勤してきた

のだ。

私たちの目の前をハンバーガーを十個ほど入れたポリ袋を提げて一人の紳士が歩いている。

数寄屋橋の主の「残飯紳士」

午前五時。

銀座はカラスと紳士の世界だ。早朝の静寂にカラスの鳴き声がひびきわたる。

スズメ、ハトが現われて、カラスがポリ袋を食い破って引っぱり出した朝食の相伴にあずかっている。まず「残飯紳士」が容器のふたをあけ、黒いポリ袋の口ひもを解き、好みのものを頂戴する。それをカラスがあさり、カラスがあさり散らした残りをハトやスズメが相伴するという共存関係が成立しているようにみえる。野良猫二匹。ネズミ十一匹。野良犬の姿はまったく見ない。

道路清掃車が落葉や道ばたのごみを吸いこみながらうなりをあげて走っていく。

数寄屋橋の方へ向かって歩く。

交番の前で、自転車泥棒が捕まっていた。

三十歳代の半ばだろうが、色白で細身のサラリーマン風の男。常習者なのだろう。若い制服のお巡りさんが、またか、といった顔で尋問している。

角のファストフード店の前にごみ収集業者の車が止まり、地下から二人の男がポリ袋を運びあげている。中身は使い捨てられた紙コップの類である。八袋あった。

数寄屋橋。小さな公園の前に「数寄屋橋此処にありき、菊田一夫」の碑がある。

公園の隣のビルの屋上にカラスが二羽。スズメの声にぎやかである。

公園に入る。ベンチの前でスズメが二、三十羽群れていた。私たちが入ると、一斉に飛び立った。巻き寿司がぶちまけられ、スズメはそれに群がっていたのである。

「誰がここまで持ってきたんだろうか」

「猫やカラスが運べますかねえ」

渡辺くんと話していると、公衆トイレの方から、人が現われた。いかにも、ぬーつと現われた感じだった。

「あら」と私はいった。「主がいるんだ」

紳士である。まだ、若い。四十歳代だろう。この男は、垢で全身が黒くなっていた

からひと目でわかった。垢武装である。

地方から出稼ぎにきて蒸発し、山谷さんやに集まり、山谷からもドロップアウトして、銀座の紳士になるのだという。昔は、私と同業者だったかもしれないな。なぜか、そんな気がした。村を捨て、家族を捨てて、ひとり銀座で生きていく。

「よし、渡辺くん、インタビュ―だ」

「やってみますか」

この国では伝統的に放浪者は尊敬される。種田山頭火、青木繁、若山牧水、山下清……しかし、浮浪者は、放浪者とは違って、人の仲間に入れてもらえない。浮浪者の中に詩人がいたっていい。

「もしもし、ちょっと話を伺いたいんですが。いえ、けっして怪しい者ではありませ
ん」

「あほ。自分を怪しい者ですと名乗る者がおるかよ」

「こわいなあ」と渡辺くん。「こわいですよ。またにしましょう」

紳士はベンチでタバコを吸いはじめた。気がかりそうに私たちの方を見ている。

「もしかしたら、新顔の仲間だと思っているんじゃないですかね」